

公的犯罪統計と体感治安の乖離に関する日英比較研究

研究代表者

拓殖大学 政経学部

守山 正

共同研究者

奈良女子大学 生活環境学部

瀬渡 章子

熊本大学 教育学部

中迫 由実

早稲田大学 人間科学学術院

小島 隆矢

明治学院大学 法学部

渡邊 泰洋

1. まえがき

わが国では、統計的には 1990 年代後半から急激に刑法犯認知件数が増加し、2002 年には戦後最高の約 370 万件を記録した。しかし、その後、減少に転じ、2012 年では約 200 万件となり、1985 年水準にまで低下している。一般に、実態として犯罪が減少すれば被害体験も減少するから、人々の犯罪不安感も低下すると考えられる。ところが、わが国で実施された直近の各種治安調査¹では、人々の不安感はいずれの調査でも統計上の犯罪減少と連動しておらず、一部の事項では不安感が増大するなど、総じて人々の不安感は一貫していない点が看取される。この問題はいわゆる「安全と安心の乖離」問題としてわが国では議論されているが²、その要因については十分に分析されているとはいえない。

統計的な意味では、政府とくに警察機関は、この 15 年間で犯罪対策に効果を上げてきたといえるが、しかし、他方で、このように不安感が低下

しない状況では、別の視点の導入が求められる。犯罪不安感が犯罪対策で重要なのは、人々の日常において「生活の質 (quality of life)」を害するからである。怯えながら生活し、自らの種々の行動を修正・制限する日常の困難を考えれば、理解は容易である。このような住民の不安感を放置すると、警察をはじめ刑事司法機関に対する人々の信頼感が低下し、その正統性 (legitimacy) が問われるだけでなく、目に見えない敵に対する憎悪から、人々の犯罪者観にも悪影響を与えることになり、厳罰化が進むことも懸念される。従って、今後は犯罪政策において、たんに犯罪を削減するだけにとどまらず、犯罪不安感を低減し、「生活の質」の向上をめざすことが求められる。

他方、イギリスでも同様に、安全と安心の乖離問題がみられ、むしろわが国よりも深刻であるといえる。1990 年代前半、統計上犯罪は減少に転じたが、住民に対する政府の世論調査 (たとえば、後述のイギリス犯罪調査 BCS) では多くの国民が犯罪は増加していると実感しているからである。

そこで、イギリス政府機関、大学研究者はこの問題にいち早く取り組み、種々の調査知見を発表して大きな成果を挙げている³。

このような状況から、本研究では、わが国で実施された不安感関連事項を含む社会調査の問題点を考察し、さらにイギリスの調査で検討された事項を勘案して、都内で不安感調査を実施した。その結果とイギリスでの調査結果を比較して、いわば人々の不安感の構造を明らかにしつつ、かつ将来わが国の対応、とくに警察活動が不安感解消のために留意すべき事項を示唆する試みを行った。

2. 目的

基本的には、研究テーマのとおり、安全と安心の乖離状況の解明を目的とする。すなわち、わが国における従来の社会調査の欠陥に鑑み、イギリスの調査手法や新理論からの示唆を受けつつ、乖離の理由や背景を探るため、実態調査を実施する。そして、その知見を日英で比較するとともに、不安感の解消策を示唆することである。そこで、下記の点などに留意して、調査を行うこととした。

(1) わが国の治安調査の問題点と修正

これまでわが国で行われてきた治安調査は一般的には、経年変化をみるために、質問事項を変えない傾向がみられ、このため、分析も年度ごとの変化をみるにとどまっており、新しい試みを導入する姿勢に乏しい。そこで、わが国で従来行われてきた治安調査の特徴をみると、全般的に次の点を指摘しうる。①全国ないし自治体内部において、一律無作為に調査対象が抽出されてサンプリングされていること、②不安感・リスク知覚の対象は「犯罪行為(刑法違反行為)」に限定されていること、③不安感のみが質問事項となっており、安心感についての分析がないこと、④犯罪に対する反応として「不安」という1種の感情だけで設問を

構成していること、⑤調査方法として、アンケート調査票による質問紙記入方式が採用されていること、などである。

これらの手法は、不安感の実態を分析するには不十分である。その理由は、第1に犯罪には地域特性があり、それに対応して不安感にも同様の特性があると考えられるからである。とくに後述のように、本研究では地域の不安要素である「不安シグナル」を問題にし、地域固有の不安感を明らかにする。第2に、欧米の先行研究を参考にすると、人々の不安感に影響しているのは「犯罪行為」だけでなく、犯罪とはいえない秩序違反行為、迷惑行為、不品行や無秩序状態(物理的、社会的)も含まれ、むしろこれらの要素の方が不安感に対する影響は強いのではないかと考えられる。第3に、不安感を理解するうえでは、地域における不安要素だけでなく、逆に安心要素も調べる必要がある。これは「安心シグナル」として考察する。第4に、犯罪や秩序違反行為、無秩序状態に対する人々の反応は、たんに不安という1種の感情ではなく、その他、怒り、不快、脅威なども含まれている可能性がある。第5に、不安という感情の発露はいわば結果であり、不安感を解明するには、人々が不安要素をどのように解釈したかが問題であり、それを知るためには調査票の記入(量的観察)だけでなく、実際に住民に対して面接調査(質的観察)を行う必要がある。

(2) イギリス調査からの示唆

イギリスでは1980年代から政府による犯罪調査(British Crime Survey, 'BCS.)⁴が実施され、その中に不安感の事項も含まれており、かなり詳細かつ大規模な調査が行われている。この調査結果は全て一般に公開されており、多くの研究者がこれらの結果を一部使用して、各自の不安感分析を行っている⁵。

本研究は、このBCSを参照して行われた不安感

調査を参考にした。これが先述の「全国安心警察活動プログラム (NRPP)」⁶である。このプログラムの最大の特徴は、マーティン・インズ (Martin Innes, カーディフ大学教授) が主導した「シグナル犯罪 (signal crime)」の視点を取り入れた点である⁷。シグナル犯罪を簡単に表現すれば、地域において人々の不安感に突出して大きな影響を与える犯罪・秩序違反行為である。言い換えれば、これらの行為は一般住民にシグナルとして被害リスクを伝達する。これを受けて、住民は、自分が直接経験しなかった被害もリスクとして知覚するようになる。問題はそれらの行為を住民がどのように理解・知覚したかという認知的要素に関わる。そこで、これを明らかにするには量的観察よりも質的観察に馴染むとして、実際の NRPP では、多くのインタビュー調査が行われている。他方、インズはこのような犯罪シグナルばかりでなく、「統制シグナル (control signal)」も存在し、逆に住民に安心感を与えるという。これは、一般には警察などの公的機関や地域独自の活動が住民の安全・安心の知覚に影響を与えるシグナルである。つまり、統制シグナルは社会統制の力として機能するという。

(3) 本研究の目的

上記の観点から、本研究は過去の治安調査では欠落していた点に着目し、またイギリスとの比較を意識して調査を行うこととした。すなわち、本研究では、第1に、全国・地方一律ではなく、あらかじめ地域を特定し、不安感の地域特性を探ることを目的とした。ここで示される不安感とは地域で解決されるべき問題を明示すると考えられるからである。第2に、不安感の対象を犯罪 (刑法に規定される行為) だけでなく、秩序違反行為・迷惑行為 (社会的無秩序)、さらには物理的無秩序も質問対象とした。つまり、不安感の要因は行為に限らず状態 (たとえば、廃れた空き家) も含まれ

ると考えられるからである。第3に、不安感だけでなく安心感も考察の対象とした。安心感が明瞭になれば、これを強化する犯罪対策が不安感解消に有効であると考えられるからである。第4に、一言で不安といっても、実際には種々の感情や知覚が混入していることに鑑み、「不安」だけでなく、「怒り」や「不快」なども調査することとした。第5に、住民の不安感の根底にある犯罪や秩序違反行為に対する理解や解釈を明らかにするために2種の調査法を併用し、質問紙による調査とインタビュー調査を行うこととした。第6に、従来、犯罪不安感と体感治安については、そもそもどう違うのか、どのような関係にあるのかが明らかではなかった。しかし、本研究においては、これをあえて区別し、後述のように、地域レベル全体の不安感を「体感治安」とし、個人レベルは「個人不安感」とした (詳細は、後述 4. (2) 「アンケート調査結果の分析」の項を参照)。

要するに、最終的には、本研究では次の点を明らかにすることを目的とした。わが国においても、①軽微な犯罪や秩序違反行為・無秩序状態が住民の不安感に影響を与えているか、②人々は不安感として、恐怖や不安のほかには不快、怒りを表現しているか、③調査対象地域において、犯罪 (不安) シグナルおよび統制 (安心) シグナルが見出されるか、④不安感の地域特性がみられるか、⑤体感治安と個人不安とで犯罪・無秩序に対する相違が生じるか、である。これらをまとめると図1のようになる。

(4) 用語法について

本研究では、日本の文献ではあまり見られない用語・概念を使用しており、若干の混乱が生じる恐れがある。そこで、以下に、用語について一定の解説や定義を行う。

①本研究ではマーティン・インズの「シグナル犯罪」概念に依拠しており、犯罪シグナル、統制シ

グナルはその典型であるが、インズの用語法では「犯罪シグナル」には（犯罪行為ではない）無秩序シグナルも含まれている。他方、「統制シグナル」も公的機関、たとえば警察などの介入を前提に「統制（control）」という語が用いられているが⁸、われわれは、広く安心感を与えるシグナルは非公的なものも含むと解した。そこで、理解しやすいように、単純に不安感を低下させる要因を「安心シグナル」、不安感を増大させる要因を「不安シグナル」とし、さらに「不安シグナル」を「シグナル犯罪」と「シグナル無秩序」に分けた。

②犯罪不安感についても、後述のように、地域レベルの「体感治安」と文字通り個人レベルの「個人不安感」に分けた。もともと「治安」という語は地域の集合的な不安感を示していると考えられるからである。まさしくインズが指摘するように、犯罪・無秩序被害の直接の経験がない者が不安を感じるのは、一般には地域全体の治安に関すると考えられる。自分が直接関係しないところで発生した犯罪・無秩序もシグナルとして伝達され、「体感治安」が構築されると考えられる。したがって、個人的には安心であるが、地域全体では不安ということが起こりうる。

③秩序違反・無秩序について、本研究が強調するのは、不安感と結びつくのは、犯罪行為に限られず無秩序も含まれ、さらに無秩序も人の行為とたんなる物理的状態に分かれる。そこで、一般の用語法に基づき、人の行為は「社会的無秩序」、物の状態や状況は「物理的無秩序」とした。

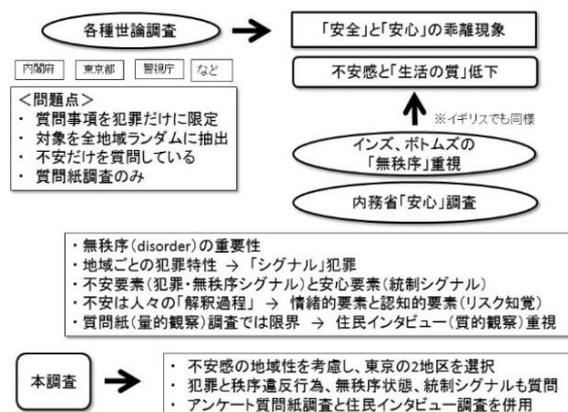
3. 方法

(1) 調査方法の概要

前述のとおり、本研究では、2種、2段階の調査を実施した。

まず、アンケート質問紙調査（量的観察）を実施し、その後アンケート調査対象地区の住民を対

図1 本調査の概念図



象にインタビュー調査（質的観察）を実施した。詳細は以下のとおりである。

1) アンケート質問紙調査の概要

アンケート調査は、墨田区、目黒区に居住する1,000世帯を対象に自治会を通じて調査票の配布、回収を実施した。東京都青少年・治安対策本部治安対策課の助言により、比較的人口移動の少ないと思われる下町の墨田区（向島警察署管内）と比較的人口移動の多い目黒区（目黒警察署管内）を設定した。これは、犯罪不安感には地域特性があり、また地域のつながりの強弱が犯罪不安感に影響を与えるという観点からである。また、とくに墨田区についてはスカイツリーの開業により地域環境の変化も考えられる。

調査項目は主に、①居住地域の評価 ②秩序違反行為・無秩序の見聞や被害経験の有無とそれに伴う感情、③安心感を高める要因、④犯罪不安感、⑤被害実態、⑥回答者属性の6項目である。

表1 調査概要

	墨田区	目黒区
アンケート調査		
配布・回収方法	自治会役員により配布・直接回収	
調査期間	2013年11月	
配布数	1000票	
回収数	832票	930票
回収率	83.2%	93.0%
ヒアリング調査		
調査時期	2014/8/4~5	
調査対象者	22名	12名
調査方法	グループインタビュー	

2) 住民インタビュー調査の概要

アンケート調査の結果を受けて、アンケート配布地域のうち協力が得られた町会に対して住民インタビュー調査を行った。具体的には、墨田区1ヶ所（押上地区）および目黒区2ヶ所（下目黒地区、祐天寺地区）であり、住民参加者は前者が22名（女性5名）、後者がそれぞれ7名と5名（女性1名）であった。調査項目は、先に行ったアンケート自由記入欄に記載された事項などを参考に、主として、近年の治安状況やその変化、地域における犯罪遭遇の不安を感じる場所及びその理由・背景、さらに地域の紐帯を示唆する地域内の行事の実施状況、これらに加えて、いわゆる秩序違反行為・無秩序などについても質問した。墨田区では1グループ7~8人程度で3グループ、目黒区は各地区で1グループとし、集団を対象にインタビューした。実際の調査では、地図に犯罪不安を感じる場所やその具体的理由や地域の治安状況の変化などを記入しながらインタビューを実施した。いずれの地区でも、インタビュー参加住民の構成では、町会役員を中心とした高齢男性が多数を占めた。

4. 結果

(1) アンケート質問紙調査結果の概要

1) 回答者の属性

回答者の性別は、全体で男性 48.2%、女性 51.8%である（男性は墨田区 52.9%、目黒区 44.2%）。年齢は、「60代」が 29.8%、「70代」、「80代以上」が 40.6%と高齢者が半数以上を占め、両区とも同様の傾向がみられる。但し、10代、20代も若干名含まれている。回答者の高齢化を反映して、同居家族の人数は「2人」が 34.3%、「3人」が 21.8%である。また 12歳未満の家族と同居している世帯は少なく（墨田区で約5~7%、

目黒区で約 4~7%）、「65歳以上の人がいる」が 65.8%と同居家族も高齢者である世帯が多い。回答者の職業は「無職」、「専業主婦」が多く、「自営業」が 17.7%、「会社員」が 13.8%と続く。但し、両区では若干の相違があり、墨田区では自営業者

図2 都内における調査対象地区

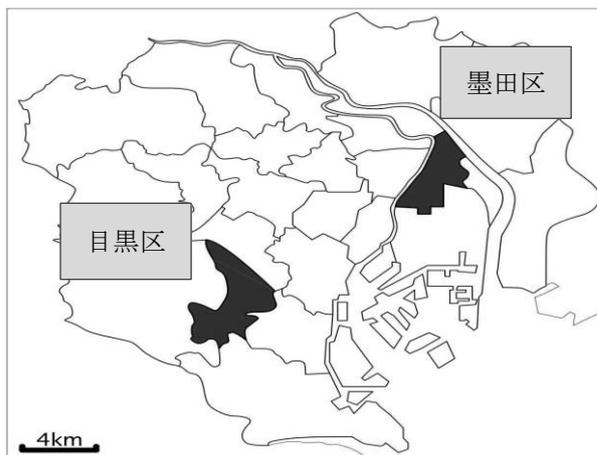


図3 アンケート配付地区（目黒区及び墨田区）



表2 調査対象地の概要

		墨田区	目黒区
人口		254,175	267,667
	男性	127,027	126,165
	女性	127,148	141,502
人口構成比	20代	31893 (12.5)	35141 (13.1)
	30代	43491 (17.1)	53296 (19.9)
	40代	40978 (16.1)	46198 (17.3)
	50代	28788 (11.3)	30137 (11.3)
	60代	32477 (12.8)	28451 (10.6)
	70代以上	41012 (16.1)	38042 (14.3)
持ち家率		48.1	43.9

注)人口構成比は、平成25年10月現在。持ち家率は、墨田区は平成22年、目黒区は平成20年のデータ。いずれも区のホームページより引用。

の比率が高いのに対して（24.3%）、目黒区では専業主婦の比率が高い（26.5%）。これは墨田区が依然、地域に密着した商店等、自営業者が多いことを物語るように思われる。

世帯年収は「200～400万円未満」が34.8%、「400～600万円未満」が24.6%、「200万円未満」が14.7%である。年金生活者が回答者の大半を占めることの反映と思われる。但し、両区を比較すると、200万円未満の比率が墨田区では19%、目黒区では10%であり、1000万円以上はそれぞれ6.9%、9.1%であった。ここには、若干、両区のデモグラフィックな構成の相違が示されているように思われる。

同じ地域の居住年数は地域密着の指数であると考えられる。この点につき、「36～40年」が15.9%、「46～50年」が11.8%であり、現住居への居住年数の長い世帯の割合が多く、中には80年以上も若干にみられた。最も居住年数が多い層は、目黒区が「36年から40年」であるのに対して、墨田区は「46年から50年」であり、人口移動で差が見られ、墨田区の方が定着率は高い。

住居の形態は「戸建て」が78.9%であり、「持ち家」は86.3%となっており、戸建ての持ち家率が高い。この比率は両区ともほぼ同じであった。高齢回答者が多いことを物語ると思われる。

近所づき合いの程度は、「親しく話をする」が39.3%、「顔が合えば挨拶をする」が32.3%と続き、「ほとんど付き合いはない」は2.0%にとどまる。両区の間で回答の傾向が顕著に異なる項目は、この「近所づき合い」の程度であり、「顔が合えば挨拶をする」は、墨田区は25.2%、目黒区は38.4%、「親しく話をする」はそれぞれ43.3%、35.9%で、墨田区が下町らしい人間関係を構築しているのに対して、目黒区は山の手地域を反映し、顔を合わせば挨拶する程度の、いわゆる「浅い人間関係（thin trust）」を示していると思われる。

日頃犯罪に関する情報をどのように入手してい

るかをたずねた。「報道番組ニュース番組」を「よく見る」が85.4%、「新聞紙、週刊誌」を「よく見る」が75.8%であった。高齢者の回答が多いためか、「インターネット上の情報」は「全く見ない」40.9%であった。

犯罪不安感に影響すると思われる回答者の性格や体力への自信の程度についてたずねた。恐がりの人や体力のない人は、通常よりも不安感が強いのではないかと考えられるからである。「私は体力には自信がある」が「当てはまる」「やや当てはまる」は29.9%であった。「私は怖がりな方である」と「私は物事に対して不安になりやすい性格である」の肯定率はそれぞれ40%、35.6%であり、要するに3割から4割がいわゆる「恐がり」の傾向があると思われる。この傾向は両区でほぼ同じであった。「私は用心深い性格である」の肯定率は48.5%であった。これも若年者と比較して高齢者の特徴であると思われる。

2) 居住地域に対する評価

居住地域について評価してもらったところ、全体で「この地域に愛着がある」、「できるなら、この地域に住み続けたい」の項目では「そう思う」が6割前後を占め、「ややそう思う」を合わせるとほぼ9割に達する。但し、両区における「この地域に愛着がある」「この地域に住み続けたい」で「そう思う」は、いずれも墨田区の方が高い（それぞれ、墨田区67.9%、66%、目黒区59.8%、59.9%）。「この地域は安心できる」、「この地域は治安が良い」の項では「そう思う」「ややそう思う」を合わせると7割を超えるが、全般的には目黒区の方が墨田区よりも高い。相対的に言えば、墨田区では犯罪不安はあるが、地域に愛着があり、目黒区はその逆の傾向にある。

一方、「この地域は、祭りなど地域主催のイベントが活発である」の肯定率が7割を超えているが、目黒区では「そう思う」の比率が27.6%と低い（墨

田区は 43.7%)。墨田区の地域行事の多さを物語っているように思われる（この点は、住民インタビューでも確認された）。さらに、「この地域は活気がある」の肯定率は全体 4 割程度にとどまる。この点はとくに墨田区の低さが目立つ（36.2%、目黒区は 47.6%）。

高齢者中心の町会運営や都内でも空き家やシャッター商店街（空き店舗）などの広がりが見られることの反映であろう。

3) 社会的物理的無秩序の見聞

いわゆる不安シグナルとしての秩序違反行為・無秩序状態に関する事項であり、さまざまな形態の秩序違反・無秩序に関する見聞実態を把握するために 16 項目の選択肢を設けた（図 4）。「よく見る」、「ときどき見る」が 5 割を超える項目は、「空き家や空き店舗」（73.1%）、「商店街がさびれている様子」（72.4%）、「路上に乗り捨てられた自転車やバイク」（70%）、「ゴミ出しのルールが守られていない場所」（69.6%）、「夜間、街灯が暗いところ」（66.6%）、「管理が行き届いていない緑」（50.6%）で、これらは人の行為ではなく、建物や環境などに関する物理的無秩序（後述の「不整備環境」）であり、これらに対して居住者が敏感に反応していることがわかる。一方「暴走族などに関わっている若者」、「昼間から公園などで飲酒している人」などの「人」が何かを行っている状況（後述の「怖い人」）、すなわち、社会的無秩序に関する事象の目撃率は低い。出かける機会が比較的少ない高齢者は、状態としてある物理的無秩序は気づきやすいが、秩序違反行為を行う人に遭遇することは少ない。その時間帯に外出の機会が少ないからではないかと思われる。

このような物理的無秩序、社会的無秩序を「見かける」との回答が墨田区の方に多かった項目は、「空き家や空き店舗」、「商店街がさびれている様子」、「たばこを吸っている様子」、「昼間から公園

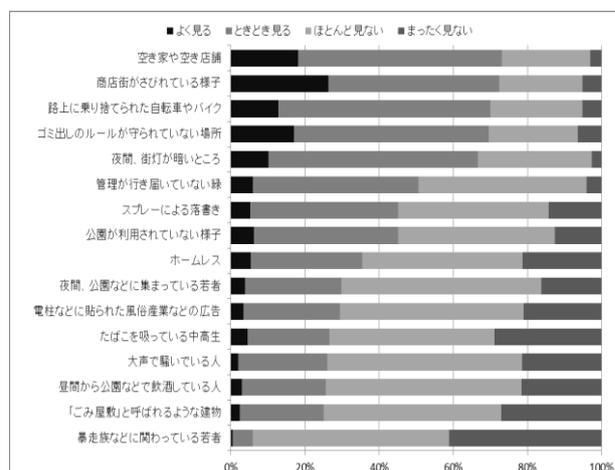
などで飲酒している人」、「夜間、公園などに集まっている若者」、「大声で騒いでいる人」である。一方、目黒区の方に多かった項目は、「スプレーによる落書き」、「電柱などに貼られた風俗産業などの広告」（後述「マナー・品行」と関連）である。これらは、まさしく目黒区における不安シグナルと考えられる。目黒区の方が住民構成上、若者の活動が活発だからではないかと推察される。

4) 社会的物理的無秩序に対する感情効果

上記 3) に対する感情効果について、「不快だ」、「腹立たしい」、「不安だ」、「怖い」の 4 つの項目から該当するものを選択させた（図 5 参照）。

「不安だ」と思う項目は、「夜間、街灯が暗いところ」、「空き家や空き店舗」、「商店街がさびれている様子」、「公園が利用されていない様子」などの物理的無秩序（「不整備環境」）によるものに多く、「怖い」と思う項目は、「夜間、街灯が暗いところ」という物理的無秩序のほか、「暴走族などに関わっている若者」、「夜間、公園などに集まっている若者」、「ホームレス」など、人が主体となる社会的無秩序（「怖い人」）に当たる項目が挙げられている。「腹立たしい」と思われている項目は、「ゴミ出しのルールが守られていない場所」、「路上に乗り捨てられた自転車やバイク」、「スプレー

図 4 社会的物理的無秩序を見かける頻度



による落書き」(「不整備環境」)などの項目への回答率が高い。なお、「不快だ」と思われる項目は「腹立たしい」での回答項目と重なるものが多かったが、前者は知覚、後者は感情であり、これらは同時に生じていると思われる。

5) 「安心シグナル」を見かける頻度

地域内での関わりの実態や防犯に関する活動の体験、見聞についてたずねた。これらの行為が、住民の安心感を与える要因、つまり「安心シグナル」として働いていると思われるからである。7つの選択肢を設定し、2択で回答を求めた。回答者には高齢者が多く、居住年数が長い居住者も多いことから、「地域のリーダーと顔見知りである」、「地域内に話し相手がいる」、「地域内に自分のことを気にかけてくれる人がいる」の肯定率は8割を超える。但し、「地域の活動に積極的に参加している」は66.2%にとどまる。「地域の人がパトロールしている姿を見かける」は85.9%、「青パト(青色回転灯がついた車)でのパトロールを見かける」は75.4%と居住者を中心として行う活動を見かける人は多い。「警察がパトロールしている姿をよく見かける」は61.8%とやや回答率が低い。

これらの項目については、若干の地域差が見いだされた。「地域のリーダーと顔見知り」「地域活動に積極的に参加している」では、墨田区がそれぞれ85.2%、73.3%であるのに対して、目黒区は77.1%、59.9%であり、前者は地域との人間関係、地域活動が相対的に活発であり、「青パトを見かける」では逆に目黒区が高く(86.3%、墨田区は63.0%)、行政サービスの差が生まれている。

しかし両区とも「地域内に話し相手がいる」が90%を超えていることから、回答者の多くの高齢者大半が地域社会内に話し相手を持ち、日頃から情報交換を進めて、安心感を高めている様子がうかがえる。

図5 社会的物理的無秩序と感情効果

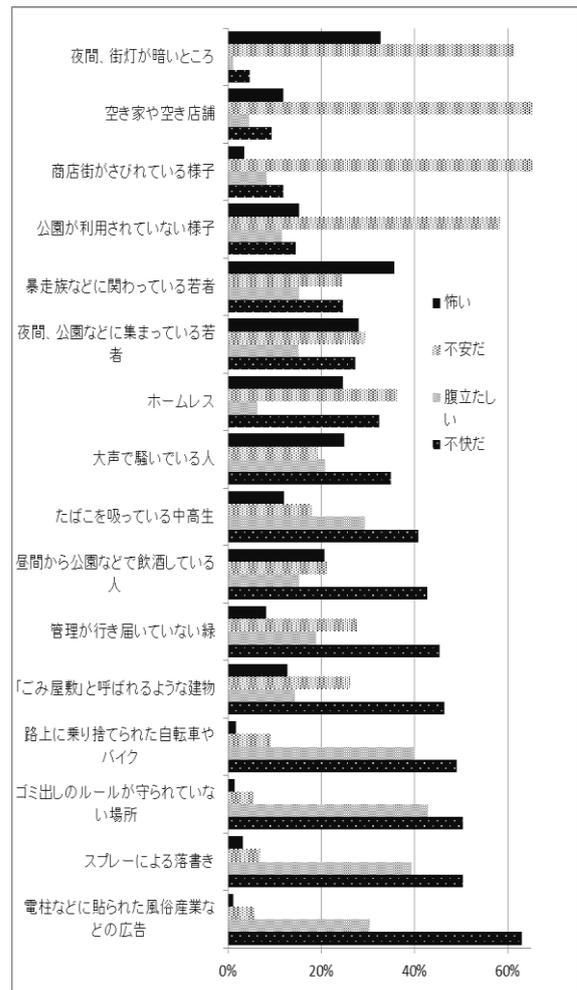


図6 犯罪不安の程度

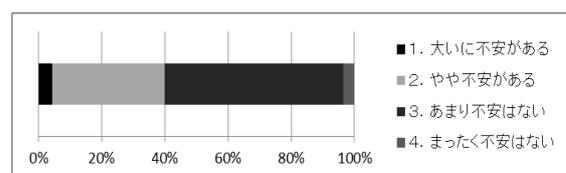
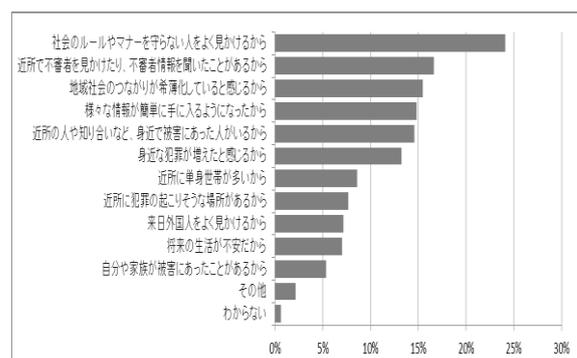


図7 犯罪不安を感じる理由



6) 居住地域での犯罪不安感について

居住地域で、回答者自身やその家族が日頃何らかの犯罪に遭う不安があるかを「大いに不安がある」から「まったく不安はない」の4択でたずねた(図6)。「大いに不安がある」が4.4%、「やや不安がある」が35.6%、「あまり不安はない」が56.4%、「まったく不安はない」が3.6%であった。この限りでは、不安と安心の比は、40対60で安心が上回った。

地区別では、「大いに不安がある」、「やや不安がある」を合わせた割合が、墨田区は46.8%、目黒区は34.0%であり、墨田区の方が不安に感じている比率が高い。

「大いに不安がある」、「やや不安がある」とした回答者に多重回答式で理由をたずねた(図7)。

「社会のルールやマナーを守らない人をよく見かけるから」が24.1%で最多であり、「近所で不審者を見かけたり、不審者情報を聞いたりしたことがあるから」が16.6%、「地域社会のつながりが希薄化していると感じるから」が15.5%と続き、「様々な情報が簡単に手に入るようになったから」、「近所の人や知り合いなど、身近で被害にあった人がいるから」といった回答も目立った。地域差が目立つのは、「ルールやマナーを守らない」が墨田区で30.3%ときわめて高く、目黒区の18.6%の倍近い。「近所の不審者」でも、墨田区20.6%、目黒区13.1%で、同様の傾向がみられる。これは先の不安感の比率が墨田区で高かったことと一致し、「マナー違反」「不審者」が墨田区の不安シグナルとも考えられる。墨田区の「不審者」については、住民インタビューでも確認されており、スカイツリー見物で地域に外部の人が紛れ込む状況を示しているように思われる。

続いて、日没後、居住地域を一人で歩いていると犯罪に遭う不安を感じるの「何時以降か」をたずねた。この設問は、しばしば海外の調査でも、

地域安全の指標として使用されることが多い。つまり、「夜間の一人歩きが可能な時間」は、海外では治安上大きな意味を持つ。本研究では「午後10時以降」が26.7%と最多で、続いて「午後11時以降」「午前0時以降」と回答が続く。「不安は感じない」が17.3%で一定の割合を占めた。地域別でも両区とも「午後10時以降」が最も多いことは同じであるが、時間に関係なく「不安を感じない」比率は、目黒区が高く(19.4%、墨田区15.5%)、これは目黒区の方が夜間の人の交通量が多いことによると考えられる。

あなたやあなたの家族が居住地域でどのような犯罪の被害にあうかという不安を、どの程度感じているか13個の選択肢について回答を求めた(図8)。これは認知的要素であり、いわゆるリスク知覚である。これによると、各項目で「大いに不安がある」「やや不安がある」と答えた比率は、「交通事故にあう」(63.4%)、「自転車が盗まれる」(53.7%)、「自宅が泥棒に入られる」(52.9%)、「子どもが不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする」(50.6%)の順に回答率が高くなっている。逆に、「凶悪犯罪に巻き込まれる」(19.7%)、「人に付きまとわれたり覗かれたりする」(17.8%)、「暴行や傷害などの暴力的な被害に遭う」(15.2%)に対する犯罪不安感は低い。このように比較的軽微な犯罪が上位を占める。

居住地域のどのような場所で犯罪に遭う不安を感じるかたずねた。「路上」が55.3%で最多で「公園」「エレベーターの中」「繁華街」と続く。「特にない」も14.4%を示した。この点につき、イギリスでも同様の指摘があり、人の目が利く自然監視の下、路上で社会的無秩序が発生している点は、不安感にとって深刻であるとされる。

7) 防犯対策について

実施している防犯対策について尋ねた。「家の鍵は郵便ポストなどに隠さない」が88.8%、「夜間は

人通りの少ない道は避けるようにしている」が81.1%であった。後者には高齢者回答者の特徴が示されている。住民インタビューでも、高齢になって夜間外出を控える傾向がみられた。「今住んでいる家は警備会社と契約している」は6.1%で低い。これらの事項では、地区別の傾向に大きな違いは見られない。

8) 犯罪の被害経験について

この5年間の被害経験について複数回答を求めた(表3)。「自転車が盗まれた」12.8%、「自宅や敷地内に無断で侵入された」9.2%、「交通事故に遭った」5.7%、「自宅や自動車などに落書きされにたり壊されたりした」5.1%の順で回答があった。

暴行などの暴力的被害、交通事故、自宅や自動車への落書き、ネット利用時の被害については地区別に大きな差はみられない。しかし、目黒区と

比べると墨田区の方の被害経験率が総じて高い。とくに自転車の盗難や自宅への空き巣侵入、つきまとい、子どもへの不審者による声かけの被害が墨田区では多く、差が大きい。

(2) アンケート調査結果の分析

アンケート調査のデータを用いて以下に示す2つの統計分析を行った。

分析Ⅰ：不安シグナルの感情効果に基づく類型化

分析Ⅱ：体感治安・個人不安感の要因分析

本研究のアンケート問2では、体感治安・個人不安感に影響を与えると思われる行為や状態(秩序違反行為、無秩序状態など)16項目(不安シグナル)について、地域で見かける程度(4段階)および感情効果(「不安だ」「怖い」「不快だ」「腹立しい」より複数選択)を聞いた。分析Ⅰでは、この感情効果に関する集計結果に基づき、不安シグナルのタイプ分類を行う。

図8 犯罪不安感の内容

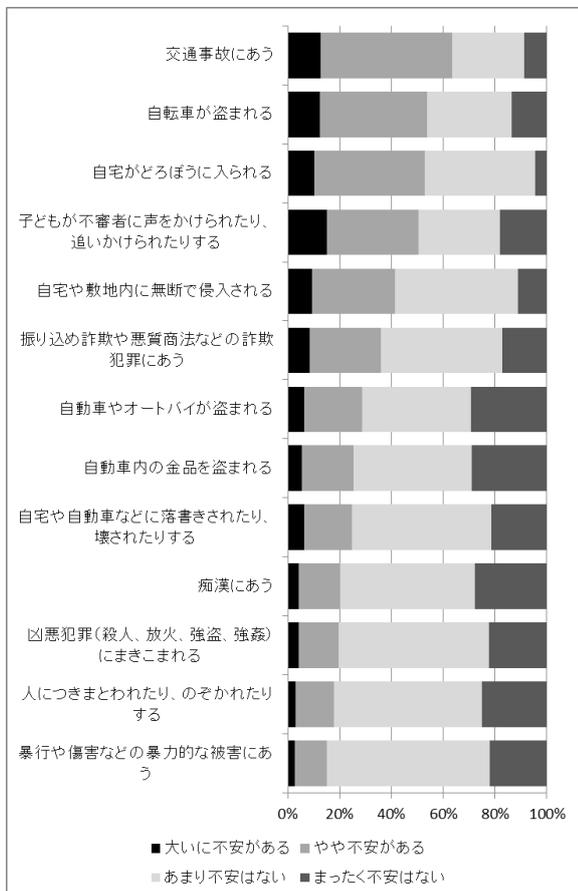


表3 犯罪等の被害経験

	全体		墨田区		目黒区	
	度数	%	度数	%	度数	%
自宅がどろぼうに入られた	76	4.3	49	5.9	27	2.9
自宅や敷地内に無断で侵入された	162	9.2	89	10.7	73	7.8
暴行や傷害などの暴力的な被害にあった	5	0.3	2	0.2	3	0.3
痴漢にあった	24	1.4	19	2.3	5	0.5
人につきまとわれた	37	2.1	29	3.5	8	0.9
人にのぞかれたりした	55	3.1	35	4.2	20	2.2
自転車が盗まれた	226	12.8	150	18.0	76	8.2
自動車内の金品を盗まれた	20	1.1	15	1.8	5	0.5
自動車やオートバイが盗まれた	31	1.8	23	2.8	8	0.9
交通事故にあった	100	5.7	49	5.9	51	5.5
自宅や自動車などに落書きされたり、壊されたりした	89	5.1	39	4.7	50	5.4
子どもが不審者に声をかけられたり、追いかけられたりした	44	2.5	32	3.8	12	1.3
路上でいきなり写真を撮られた	10	0.6	10	1.2	0	0.0
振り込め詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪にあった	65	3.7	23	2.8	42	4.5
インターネットを利用した犯罪の被害にあった	12	0.7	7	0.8	5	0.5
その他	89	5.1	48	5.8	41	4.4

分析Ⅱでは、体感治安（問1-5）および個人不安感（問4）に影響を与える要因を把握する。その際、分析Ⅰにより分類した不安シグナルを候補要因として取り入れる。

1) 分析Ⅰ：不安シグナルの感情効果に基づく類型化

不安シグナル16項目×感情効果4項目の集計結果として得られる度数行列に対して対応分析を適用する。分析の結果、得られた第2軸までの項目布置図を図9に示す。分析対象とした不安シグナルの感情効果に関する集計結果を表4に示す

（不安シグナルの表示順は分析結果に従って並べ替えており、第1列目には分類結果を表示している）。

対応分析の結果は、第1軸の寄与率=79.7%、第2軸の寄与率=17.1%であった。ほぼ第1の軸で説明されていることがわかる。図9によれば、各犯罪シグナルの与える感情効果は次のようである。

①「空き家など」「さびれた商店街」「未利用公園」「街灯暗い」を見かけることは、「不安だ」という感情を喚起する効果がある。これらはいずれも環

境の管理や利用の状態を表しており、「不整備環境」と呼ぶことにする。

②「夜集まる若者」「暴走族など」「ホームレス」を見かけることは、「怖い」という感情を喚起する効果がある。これらはいずれもある種の人物集団を表しており、「怖い人」と呼ぶことにする。

③「昼間から飲酒」「大声で騒ぐ」「ゴミ屋敷」「管理悪い緑」「たばこ中高生」を見かけることは、「不快だ」という感情を喚起する効果がある。これらはいずれもそのように思わせる迷惑な行為

図9 不安シグナルの感情効果に関する対応分析

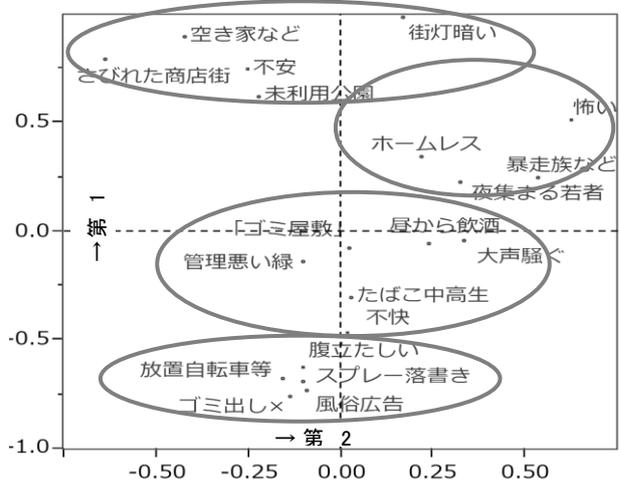


表4 不安シグナルの感情効果に関する集計と分類

分類	不安シグナル		感情効果			
	略称	実際のワーディング	不安	怖い	不快	腹立たしい
環境不整備	街灯暗い	2) 夜間、街灯が暗いところ	534 (30.3%)	284 (16.1%)	41 (2.3%)	10 (0.6%)
	空き家など	1) 空き家や空き店舗	489 (27.8%)	78 (4.4%)	62 (3.5%)	30 (1.7%)
	さびれた商店街	9) 商店街がさびれている様子	412 (23.4%)	19 (1.1%)	64 (3.6%)	45 (2.6%)
	未利用公園	8) 公園が利用されていない様子	177 (10.0%)	46 (2.6%)	44 (2.5%)	35 (2.0%)
怖い人	ホームレス	14) ホームレス	216 (12.3%)	146 (8.3%)	192 (10.9%)	37 (2.1%)
	暴走族など	16) 暴走族などに関わっている若者	116 (6.6%)	170 (9.6%)	118 (6.7%)	73 (4.1%)
	夜集まる若者	13) 夜間、公園などに集まっている若者	186 (10.6%)	178 (10.1%)	173 (9.8%)	96 (5.4%)
迷惑・不快	大声騒ぐ	15) 大声で騒いでいる人	137 (7.8%)	178 (10.1%)	249 (14.1%)	148 (8.4%)
	昼間から飲酒	12) 昼間から公園などで飲酒している人	115 (6.5%)	111 (6.3%)	230 (13.1%)	82 (4.7%)
	「ゴミ屋敷」	7) 「ゴミ屋敷」と呼ばれるような建物	142 (8.1%)	69 (3.9%)	250 (14.2%)	77 (4.4%)
	管理悪い緑	3) 管理が行き届いていない緑	127 (7.2%)	38 (2.2%)	209 (11.9%)	87 (4.9%)
	たばこ中高生	10) たばこを吸っている中高生	103 (5.8%)	69 (3.9%)	235 (13.3%)	169 (9.6%)
マナー・品行	放置自転車等	6) 路上に乗り捨てられた自転車やバイク	73 (4.1%)	14 (0.8%)	393 (22.3%)	322 (18.3%)
	スプレー落書き	4) スプレーによる落書き	51 (2.9%)	23 (1.3%)	364 (20.7%)	285 (16.2%)
	風俗広告	5) 電柱などに貼られた風俗産業などの広告	29 (1.6%)	6 (0.3%)	328 (18.6%)	158 (9.0%)
	ゴミ出し×	11) ゴミ出しのルールが守られていない場所1	55 (3.1%)	15 (0.9%)	517 (29.3%)	440 (25.0%)

やその結果としての環境の状態を表しており、「**迷惑・不快**」（な行為や環境）と呼ぶことにする。

④「放置自転車等」「スプレー落書き」「ゴミ出し×」「風俗広告」を見かけることは、「腹立たしい」という感情を喚起する効果がある。これらはいずれもマナーや品行に関わる行為の結果を表しており、「**マナー・品行**」（に関わる行為や環境）と呼ぶことにする。

以上により、16種類の不安シグナルを、それらが与える感情効果に基づいて「不整備環境」「怖い人」「迷惑・不快」「マナー・品行」の4つに分類できた。各分類の与える感情効果は、対応分析によれば、一般的に「不整備環境＝不安」、「怖い人＝怖い」、「迷惑・不快＝不快」、「マナー・品行＝腹立たしい」となるが、この対応関係は相対的なものであることには注意すべきである。分析対象である**表4**の集計表部分を見ればわかるが、各分類は特定の感情のみを喚起するわけではない。ある不安シグナルによって4つのうちのどの感情が、より喚起されるかという相対的な大小関係において、他の不安シグナルよりも相対的に大きい、という対応関係を空間布置として視覚化したものが**図9**である。特定の感情のみを喚起するとの誤解をさけるため、各分類の名称には対応する感情ではなく、「どのような行為や環境状態か」を表す文言を用いている。

2) 分析Ⅱ：体感治安・個人不安感の要因分析

次に、体感治安（問1-5）および個人不安（問4）を目的変数とした分析を行い、体感治安・個人不安に影響を与える要因を把握する。

A) 分析方針

本分析における仮説となる因果関係の概略を**図10**に示す。

分析の主眼は、不安シグナルが体感治安を悪化させ、個人不安を増大させる効果を把握すること、および、逆に体感治安を向上・個人不安を低下さ

せる行為や状況（安心シグナル）の効果を把握することにある。しかし当然、様々な個人属性や地域特性、さらには実際に犯罪にあった被害経験などの影響も考えられるので、これらを共変量として説明変数の候補に含むこととする。また、「体感治安」「個人不安感」の両変数はしばしば同一視される概念のようであるが、日常言語あるいはアンケート調査の項目として用いる場合には両者は微妙なニュアンスの違いを伴って使い分けられているように思われる。そこで、本分析の結果をもとに「体感治安」「個人不安感」の違いについても考察を加える。

B) 目的変数に関する検討

まず、目的変数である体感治安・個人不安感の回答の分布をヒストグラムとして**図11**に示す。

図10 因果仮説

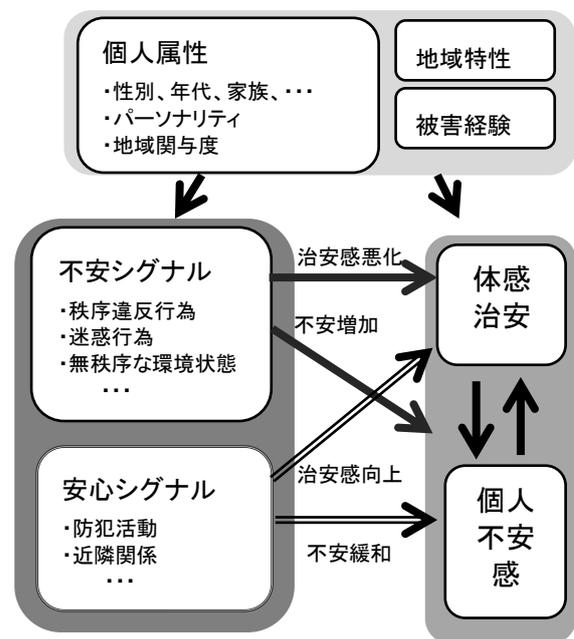
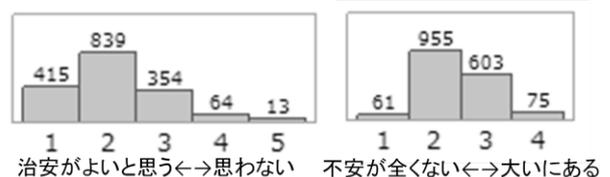


図11 体感治安・個人不安感の分布



体感治安については若干分布が「治安がよい」側に偏っているものの、そのまま1~5点と得点化して量的変数として扱っても大きな問題はないように思われる。しかし個人不安感については4段階評価のうち中央寄り2段階に回答が集中しており、量的変数として扱うことにやや問題を感じる。

そこで両変数とも本来の尺度水準である順序尺度として扱うこととし、要因分析の方法としては順序ロジスティック回帰分析を用いることとする。

C) 説明変数に関する検討

次に、説明変数に関する検討を行う。図10に示した候補変数は、不安シグナル、安心シグナル、個人属性、地域特性、被害経験である。

①不安シグナルについて

アンケート問4の前半部分では、16項目の不安シグナルを地域で見かける程度について4段階評価を求めている。また、分析Iの結果として、16の不安シグナルを「不整備環境」「怖い人」「迷惑・不快」「マナー・品行」の4つに分類した。そこで、不安シグナルを見かける程度を1~4点(まったく見ない:1~よく見かける:4)と得点化した上で、4つの分類ごとに該当する不安シグナル項目の平均得点を求めた合成変数を作成し、説明変数の候補として分析に用いる。

これら合成変数の分布をヒストグラムとして図

12に示す。いずれも標準偏差は0.5程度である。分布の歪みは一部みられるが、特段の問題は感じられない。これら変数間にはいずれも正の相関があるが、相関係数は最大0.6未満であり、同時に説明変数としても多重共線性を危惧するほどではないと判断できる。

②安心シグナルについて

安心シグナル(体感治安を向上・個人不安感を緩和させる行為や状況)としては、次の設問が該当する。いずれも「はい・いいえ」で回答する設問である。

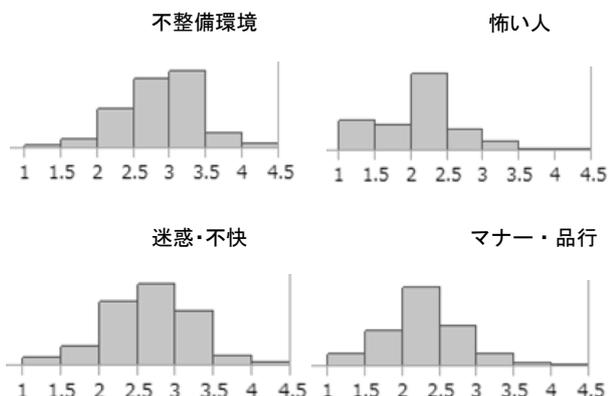
問3:

- 1) 地域のリーダーと顔見知りである
- 2) 地域内に、話し相手がいる
- 3) 地域内に、自分のことを気にかけてくれる人がいる
- 4) 地域の活動に積極的に参加している
- 5) 地域の人がパトロールしている姿を見かける
- 6) 青パト(青色回転灯がついた車でのパトロール)を見かける
- 7) 警察がパトロールしている姿をよく見かける

問11:

- 1) 家の近くに交番や警察署がある
- 2) 昼間、自宅の周辺は人通りが多い
- 3) 夜間、自宅の周辺は人通りが多い

図12 合成変数化した不安シグナルの分布



これらに「はい」の場合を1、「いいえ」あるいは無回答の場合を0としてダミー変数化し、分析に用いる。

①個人属性について

分析に用いる個人属性を以下に示す。カッコ内はコード化の方法を簡単に記している。

基本属性:(問9)

「性別」(男性=1,女性=0)、「年齢」(10歳ごと:10代~80代以上)、「職業」(10水準)

生活状況：(問9、問11)

「同居家族」(子ども、高齢者など複数選択：該当する人の同居有=1,無=0)、「自動車・バイク・自転車の所有」(有=1,無=0)、「インターネット利用」(はい=1,いいえ&無回答=0)

地域関与度：(問9-4)

「近所づきあいの程度」(4段階評価：ほとんどない=1~親しく話をする4)

パーソナリティ (問14)：

「私はこわがりな方である」、「私は物事に対して不安になりやすい性格である」、「私は心配症である」、「私は体力には自信がある」、「私は用心深い性格である」(いずれも5段階評価：あてはまらない1~あてはまる5)

以上の個人属性のうち、段階評価尺度である「地域関与度」「パーソナリティ」については、回答の分布をヒストグラムとして図13に示す(後の分析でモデルに採用された変数のみ表示)。標準偏差はいずれも0.9~1.0程度である。

②地域特性について

一般的には様々な項目が考えられるが、本研究においては比較的狭い2つの地域が調査対象地域であるので、居住地区(目黒区及び墨田区)自体を、地域特性を表す変数として分析に用いる。

③被害経験について

アンケート問12にて16種類の犯罪種別ごとに過去5年間の被害経験の有無を聞いているが、種別ごとの「経験有り」の割合は全体的に小さいため、「いずれかの被害経験有=1、いずれも無=0」とするダミー変数として分析に用いる。なお、「い

ずれかの被害経験有」である回答者は668名(37.9%)となる。

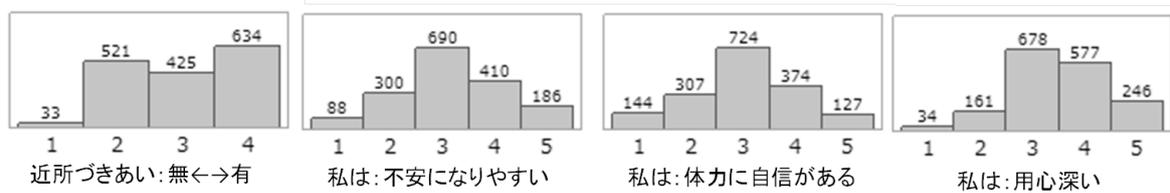
D) 順序ロジスティック回帰分析の結果

以上の設定のもと、順序ロジスティック回帰分析を実行した。候補となる要因変数の中から採用変数を決定するためにはステップワイズ式の変数選択を用いた。その際の変数投入/削除の基準はp値=0.05を目安とし、変数増減法により変数選択を行った。

分析結果を表5に示す。推定値は正の場合に治安向上・不安低下(よい影響)、負の場合に治安悪化・不安増加(悪い影響)を表すよう符号調整してある。標準化の操作は行っていないので、段階尺度については1段階の増加に対する効果、0-1型のダミー変数については0に対する1の効果を表す。いずれが0か1かが紛らわしい変数は変数名の後の[]内に補足説明を加えた(例えば、「地区[目黒-墨田]」は、墨田に対する目黒の効果)。ただし「職業」については、10水準のままでは有意な効果が得られなかったため、適当に水準併合を行い2水準化すると「体感治安」「個人不安感」とも有意となった。しかし両変数で水準併合の結果が異なっており、また、解釈も困難であるため、本報告書内では内容の解釈は控える。

要因効果の大きさについて簡単に説明する。ロジスティック回帰分析における要因効果は、目的変数のオッズ(そう思わない人に対する、そう思う人の割合)を対数変換した「対数オッズ」に対する効果を表す。対数の底は自然対数(2.718...)である。従って、自然対数を底として要因効果を

図13 地域関与度、パーソナリティの分布(採用された変数のみ)



指数変換した数値は「オッズを何倍にする効果があるか」という意味を持ち、「オッズ比」と呼ばれる。表5中の「オッズ比」は推定値の指数変換値を掲載したものである。

例えば、要因効果0.2とは、 $e^{0.2} \approx 1.22$ であるから、オッズを1.22倍にする。つまり「そう思う人と思わない人が半々ずつ(50/50)」という状態を、「そう思う人が約10%多い(55/45 \approx 1.22)」状態にする効果がある。同様に、0.4の効果は「50/50 \rightarrow 60/40」、1の効果は「50/50 \rightarrow 75/25」とする効果を表す。効果の符号が負の場合は、逆に分母の方を大きくする効果と考えればよい。

3) 分析結果の考察

表5の分析結果をもとに考察を加える。まず、「不安シグナル」の影響について。いずれの不安シグナルについても「体感治安」「個人不安感」の少なくとも一方に対して、有意に治安を悪く、または不安を高めるように感じさせる効果を持つ。要因効果の推定値は約-0.4~-0.65と絶対値が総じて大きく、それらの行為や状況を地域で見かける程度が平均1段階上がると、「治安がよい/悪い」「不安がない/ある」のオッズを「50/50」から「40/60~35/65」程度に悪化させる。中でも「怖い人」の効果が最大であり、体感治安と不安の両方に同程度の影響を及ぼす。「環境不整備」も体感治安と個

表5 順序ロジスティック回帰分析の結果

要因項目		目的変数			犯罪不安		
		体感治安	推定値	オッズ比	p値	推定値	オッズ比
不安シグナル	環境不整備	-0.398	0.672	0.001	-0.534	0.587	<.0001
	怖い人	-0.643	0.526	<.0001	-0.626	0.535	<.0001
	迷惑・不快				-0.403	0.668	0.005
	マナー・品行	-0.443	0.642	0.000			
安心シグナル	地域に自分を気にかける人有	0.358	1.431	0.022			
	地域パトロール_見かける	0.400	1.492	0.009			
	警官パトロール_見かける	0.369	1.447	0.001	0.267	1.306	0.016
	自宅近くに交番警察	0.261	1.298	0.017			
	自宅周辺夜間人通り多い				0.446	1.562	0.000
地域関与	近所づきあい有	0.196	1.217	0.001			
基本属性	性別[女性-男性-無回答]	-0.125	0.883	0.024			
	職業[(内容は省略)]	0.144	1.155	0.010	0.155	1.168	0.005
生活状況	バイク所有	0.250	1.284	0.053	0.448	1.566	0.001
	自転車所有	-0.448	0.639	0.001			
パーソナリティ	私は:不安になりやすい				-0.517	0.596	<.0001
	私は:体力に自信	0.119	1.126	0.018			
	私は:用心深い	0.214	1.239	0.000			
地域特性	地区[目黒-墨田]	0.226	1.253	0.055			
被害経験	被害経験有				-0.982	0.374	<.0001

人不安感の両方に影響するが、「個人不安感」への影響の方が大きい。「迷惑・不快」「マナー・品行」は個人不安と体感治安の一方に対してのみ有意な効果が得られているが、両者の相関係数が0.52とやや高く、一方を採用すれば他方が非有意となるという状況であった。つまりこの相違については積極的に解釈しない方がよいと思われる。

次に、「安心シグナル」の影響について。「地域に自分を気にかける人物」「(住民による)地域パトロール」「警官パトロール」「自宅近くに交番警察」が「体感治安」に対して0.25~0.4程度の影響を持つ。「個人不安感」に対しては「警官パトロール」が約0.25、「自宅周辺夜間人通り多い」が約0.45の影響を持つ。

「地域関与度」の変数として用いた「近所づきあい有」も0.2弱の「体感治安」向上効果がある。これも「安心シグナル」の1つと考えることも可能であるが、変数の内容が両極的であるため、近所づきあいが少ない側は「不安シグナル」、つきあいが多い側は「安心シグナル」ということになり、いずれかに分類することはしにくい。

「基本属性」「生活状況」に関しては、女性の体感治安評価が低いなど、一部解釈可能な結果を含むが、職業、バイク所有、自転車所有による評価の違いについては積極的な解釈がしにくい。もとより、**図 10** に示した因果仮説においては、これら変数の位置づけは共変量（主たる関心のある要因のほか、目的変数に影響が考えられる変数）であるから、内容解釈は必ずしも必要ではないと考える。

「パーソナリティ」について。「体力に自信」「用心深い」は「体感治安」を少し上げ、「不安になりやすい」は「個人不安感」を大きく高める。

ところで、ここで採用された3変数の間にも、例えば「体力に自信」「用心深い」が「不安になりやすい」に影響するといった因果関係を考えられ

そうである。すると、有意な効果を得られていない「体力に自信」「用心深い」から「個人不安感」に対しても、「不安になりやすい」を介した間接影響があることになる。そこで「体力に自信」「用心深い」を説明変数、「不安になりやすい」を目的変数とした重回帰分析を行ったところ、「体力に自信」からは負（偏回帰係数=-0.127）、「用心深い」からは正（偏回帰係数=0.387）の有意な効果が得られた。この結果から「不安になりやすい」を介した「個人不安感」への間接影響を考えると、「体力に自信」は個人不安を低くし、「用心深い」は個人不安を高くする方向に作用することになる。

従って、「用心深い」人は、そうでない人に比べて「体感治安」は「よい」と評価するが、「個人不安感」は「不安がある」と評価する傾向がある。「体感治安」「個人不安感」の相違を表す変数となっている。

「地域特性」については、目黒区の方が墨田区より「体感治安」がよいと回答している。「個人不安感」に対しては、両地区に有意な差は得られていない。

「被害経験」は「個人不安感」にのみ、非常に大きな効果を有する。オッズ比0.374というのは、「不安がない/ある」を「50/50→7/93」程度に悪化させる効果である。

最後に、**表 5** を縦方向に見て、「体感治安」「個人不安感」の違いについて総括する。まず、「不安シグナル」は両者に大きな影響を与えており、影響の違いはあまり明確ではない。その他の要因に関しては、「体感治安」に対しては様々な要因が少しずつ影響を及ぼしているのに対し、「個人不安感」に対しては「被害経験」「不安になりやすい」など少数個の強い要因が影響しているという印象である。

言葉の意味を考えると、「治安がよい・悪い」という評価の対象は「地域」であり、「不安がある・

ない」という評価の対象（主語）は「私」である。従って、「体感治安」とは、地域の治安の状況を客観的な態度で（もちろん各個人の経験や個性に基づく主観評価ではあるが、その評価態度としては客観的に）評価したものであり、「個人不安感」はそもそも主観的な概念の評価であるといえる。

主観的评价である「個人不安感」に対しては「被害経験」「不安になりやすい」という個人的要因の影響が大きいこと、客観的评价である「体感治安」にはこれら要因は有意な直接効果がないことは、上記の考察と符合する結果といえる。

また、地域関与度や安全シグナルなど地域に関する要因は、評価の対象が地域である「体感治安」の判断材料として（あるいは評価バイアスとして）働く。しかし「個人不安感」を低下させる効果を持つ地域関連要因は少ない。これは「個人不安感」評価の対象は回答者自身であって地域ではないことに関連していると思われる。

以上の結果および考察は、「体感治安」「個人不安感」は同一視するべきでなく、別個の概念として区別して扱われるべきことを示唆する。この点に関する今後の課題としては、両変数の共通部分と相違部分を、潜在変数などを用いて因果グラフ中に明示的に表現したモデルを考えること、調査対象地点数を増やした場合の地区別平均としては「体感治安」「個人不安感」およびそれらの要因は一致するのかを検討すること、などがあげられる。それら課題の成果が得られれば、居住者の意識というアウトカム指標の把握と評価のためのよりよい方法論を検討することが可能となろう。

4) 分析のまとめ

- ・「不安シグナル」16項目を、それらが与える感情効果に基づいて4つに分類した。
- ・「不安シグナル」は、「体感治安」「個人不安感」の両者に大きな影響を与えることがわかった。
- ・「安心シグナル」も、「体感治安」「個人不安感」

に影響を与える。とくに地域関連の項目は「体感治安」に影響するが多い。

- ・「被害経験」「不安になりやすい」など個人的要因は、「個人不安感」にのみ非常に大きな影響を与える。
- ・以上に基づき、「体感治安」「個人不安感」の違いについて、前者は地域を評価対象とする客観的评价、後者は自分自身の感情を対象とする主観的评价という位置づけを与えた。

(3) 住民インタビュー調査の概要と分析

インタビューは墨田区、目黒区の2地区3町会の役員を対象に、不安シグナル、安心シグナルに焦点を当てて実施した。出てきた話題を分類して、項目ごとに考察を行った。以下、町会別に結果を示すが、墨田区は出席役員数が多いことから情報量も多い。

1) 墨田区押上西和町会

2012年5月に開業したスカイツリーの足元の地域。町会エリアを二分するように東武電鉄、京成電鉄が通る。近年マンション建設が盛んになり若年層の転入もあるが、数十年以上の長きにわたってこの地域に住み続けている人も多い。区画整理されていないエリアは狭幅員の路地が迷路状に入り組む木造密集住宅地となっている。町会の世帯数は約600世帯で、町会の組織率は8割以上とかなり高い。表6は、インタビューで得られた情報を整理したもので、以下の特徴がみられる。

① 犯罪・社会秩序違反行為

地域で経験されている犯罪や秩序違反行為には、空き巣、ひったくり、無言電話、若者のたまり場、バイクの騒音、ごみ出しのルール違反など多様であり、それ自体住民に恐怖感、不快感を与えている。しかし、15年程前と比べて犯罪は減少したと感じられている。

② スカイツリーの影響

地域にとって近年最大の環境の変化は、スカイ

ツリーの開業である。国内外から観光客が訪れ、町内にも流入してくる「よそ者」に対して多くの住民が不安を抱いていた。実際、路地に迷い込んできた若者に不安を覚えた人もいるが、スカイツリー側の警備体制の強化や周辺地域への防犯カメラの設置によって、開業前よりも治安の向上を実感している人が多い。また、町内に流れて来た客を下町気質でもてなす雰囲気があるという。スカイツリーの直下で深夜に騒ぐ若者を迷惑視する人もいるが、逆にそこに静かに佇む若者や労働者に

温かい眼差しを向ける人がいるなど、スカイツリーの開業により当初懸念されていた地域を不安に陥れる事態は生じていない。

③ 居住者層

昔のように地域で世話をやく人がいなくなり、また新しいマンションに若年層が転入してきて町会活動には非協力的であることから、地域の紐帯が弱体化するのではないかとの懸念がみられた。とはいえ、特定のトラブルメーカーもいない地域は概ね平穏だと評価されている。

表6 住民インタビューによる不安シグナルと安心シグナル

項目	表示（語られた内容）	内容（リスク、利益）	効果（影響）
犯罪、秩序違反	以前は泥棒を皆で追っかけて捕まえたことがあるが、最近では泥棒と言うと何をすらかわらないから皆引っ込んでしまう。	自分や地域住民の身体や財産への侵害の恐れ	怖い
	道幅の狭い路地が多く、侵入窃盗が発生した。	地域住民の財産侵害	怖い
	暗い所で痴漢が出た。	特定地点の安全	たまにしか起こらないけど、不安だ
	夜中に無言電話が鳴り続ける。	自分の身の危険	深夜だから余計に怖い
	オートバイでひたつられそうになった。しかし、被害届は出さなかった。	自身の財産と近隣の安全	被害届を出すや犯罪の多い区だと思われる
	ひたつられたお婆さんが転んでしまい怪我をした。	身の安全	怖い。パトロールをしてほしい。
	夜間、街頭で追いかげられた。どこに逃げてよいかわからない。	自分の身の危険	夜間にあいているお店が無かったので怖かった。
	夜間、駐車場で中学生のたまり場になっている。	何をしているかわからない	不安だ
	マンションの上からタバコの吸い殻を捨ててくる人がいる。壁がちよっと焦げた。	大きな火事になる恐れ	火は怖い
	夜中の12時半に決まった場所でバイクを吹かす者がいる。	社会秩序が乱れる	腹立たしい
スカイツリーの影響	ゴミ出しルールを守らない賃貸の独身者がいる。	生活ルール違反	どんな人かわからなくて不安
	スカイツリーの付近で若者が奇声を発したりする。	地域秩序の乱れ	迷惑だ
	スカイツリーができて、知らない人が路地に入ってきて、家の前で座り込んでいた。	知らない人だと、何かされるかもしれない	カギをかけて留守にするところを見られたくないので、外出をとりやめた。
	スカイツリーやその周辺の警備が強化された。	地域安全の確保	安心
	スカイツリー付近で佇んでいる。	居方が機能している	癒やされる
	スカイツリーはあまりにきれいすぎて、悪い人が集まってこない。	地域の秩序が維持されている	安心
	スカイツリーができて治安が悪くなるかと思っただが、防犯カメラがあるなどにより、犯人を検挙した。	防犯カメラによる近隣の安全確保	安心
	スカイツリーの注目度が高く、警備体制が強化された。	警備による近隣の安全確保	むしろ安全になった
	スカイツリーができて、よく知らないお客さんが内外から来るようになった。	下町気質を發揮する	積極的に直接対応
	スカイツリーの近隣町会には全て防犯カメラが設置され、それによって外から来た人も地域の人も監視されている。	防犯カメラによる近隣の安全確保	誰も悪いことができない感じ
居住者層、住民気質	新設マンションが多く、地元で慣れない若者が増えて、町会に非協力的。	地域紐帯の弱体化	不安
	世話役のお爺ちゃん、お婆ちゃんがいなくなった。	地域の治安が悪くなったと言えなくなった	コミュニケーション減少
	トラブルメーカーがいない。	近隣の平穏が保たれている	安心
地域イベント・町会活動	盆踊りを40年継続している。	地域紐帯が強化される	地域に一体感がある
	新しいマンションを建てる時に建築主に町会の会員になることをお願いする。新しい住民が行事に参加して喜んでくれる。	地域紐帯の強化	町会が活性化される
	この町会は、盆踊り、餅つき、神社の祭礼など行事が多い。	地域の安全確保	この地区で下手なことはできないという感じ
	お祭りを若手を中心に他の地区と連合神輿をやっている。	広範な地域間の連携強化	地域全体が活性化される
地域環境	神輿を担ぐお祭りの際に、担ぐ人を外から雇うことはない。	手作り、自発的役割分担を重視	地域の一体感
	道路の拡幅工事が予定されている。	道路の拡幅に伴う立ち退き（住民の転出）、住民意識の崩壊	懸念
	踏切付近の高架工事が近いうちに始まる。	工事関係者等よそからの出入り増加に伴う地域環境悪化	懸念
	各個人の玄関先の門灯が消えているところが多い。	近隣の安全と社会の秩序	ちよっと嫌な感じ
防犯活動、防犯対策	空き店舗が増えているが店舗併用住宅なので中に居住者はいる。	地域を監視する目は残存	不安ではない
	逆走している自転車などマナーの悪い人に警察が注意しない。	社会の秩序	腹が立つ
	道を歩いていて猛スピードの自転車の女の子に注意したら、うるさいと返された。		おっかない
	パトロールの際に、あまり注意しないようにしている。	トラブルに巻き込まれる恐れ	注意すると反感を買うだけ。
	振り込め詐欺の電話が2~3件かかってきたが日頃から互いに用心している。	掲示板に注意喚起の貼り紙をする等、地域コミュニケーションによる安全の確保	安心
	夏休みに子供が連続して交通事故に遭った。	交通安全だけでなく、他の事件や事故への警戒心も高まった	注意喚起看板を二つ設置した
	子供の登下校の見守りを5年ほどやっている。	子供の安全確保	子供と挨拶するのが楽しい
	大型スーパーが協力して、2年前に踏切付近に防犯カメラが4台設置された。	ひたつくりや痴漢が減った感じ	治安が良くなった
警察のパトロールを見かけるとホッとする。	地域の治安が保たれる	安心	

* 網掛けは、安心シグナルに相当

④地域環境

スカイツリーは地元商店街に予想以上の経営的打撃を与え、シャッターを下ろした店舗も目立つもののしかし、店舗は個人経営で住宅を兼ねているため空家とはならず、地域を見守る目は健在である。しかし今後予定されている商店街の道路拡幅事業に伴う店舗の立ち退きによる影響が心配されている。また以前、工事関係者の地区内出入りが多かった時期に犯罪が起きたことから、これから始まる踏切付近の高架工事についてもその影響が懸念されている。町内には防犯灯が設置されているが、各戸の門灯はさらに安心感を高めるので、積極的に点灯してほしいとの要望がきかれた。

⑤地域イベント・町会活動

町会が積極的に取り組む地域の3大イベントは、盆踊り、神社の祭礼、餅つきである。これらの活動を支えていると考えられるものは、地域住民および町会役員の熱意と地域愛、町会活動の拠点となる会館の所有と活用、活動資金（月額700円の町会費）などのバランスのとれた「資源」である。町会はこれらの活動基盤の上に、40年間続けられてきた盆踊りに若手を巻き込む仕掛けや近隣町会と連携して神社の祭礼神輿を行うなど、役員の高齢化や地域の将来を危惧する声も聞かれるなかで、町会役員

のアイデアや若手の自発的な活動によって地域活動の継承を模索している。これらの活動は、その

他の日常的な活動と相まって地域の紐帯を強め、住民の安心感の高揚、ひいては防犯力の向上という好循環を生み出していると推察される。

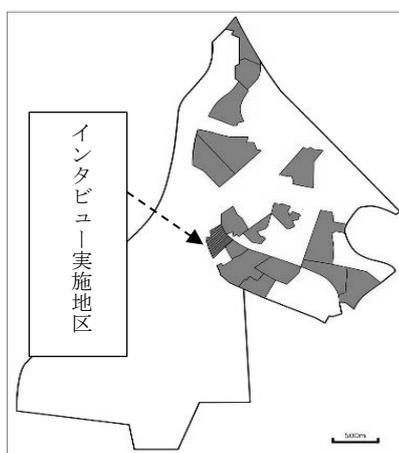
⑥防犯活動、防犯対策

長年地域で暮らす町会役員は地域外の人を容易に識別でき、すれ違う人との挨拶や声掛けは大事だと感じている。通行マナーの悪い自転車の若者に注意することもあるが、逆切れされることもあり怖いと感じている。20年程前に近所の数人で泥棒を捕まえて警察から表彰を受けたことがあるが、今はトラブルに巻き込まれる恐れがあるので地域パトロール時でも人に注意しないようにしている。警察のパトロールは安心感につながる。警察官がマナーの悪い自転車の利用者に何も注意しないことがあるが、きちんと注意してもらいたいと感じている。子どもの登下校の見守り活動が、近隣町会を巻き込んで実施されており、子どもとのふれあいが楽しいと感じられている。子どもが被害にあった交通事故をきっかけに他の事故・事件への警戒心も高まり、目に見える活動として注意看板の設置につながった。スカイツリーの開業前から踏切付近に設置された4台の防犯カメラは実際に数件の被疑者の検挙につながっており、住民の安心感が高い。町会が防犯カメラの管理運営委託を受けていることも、防犯カメラへの抵抗感を減らし、安心感の向上につながっている。

⑦まとめ

墨田区押上西和町会では、実際の犯罪も起きているが、犯罪とまではいかない迷惑行為、社会的無秩序（不安シグナル）により住民の不安感や不快感が生じていることが確認された。居住年数の長い住民の高齢化と新規転入者との間で生活文化やモラル感覚上のギャップが生じているが、熱心な地域活動によってそれを埋める努力も行われている。町内に設置された防犯カメラ、大規模商業施設の警備強化による効果も見逃せないが、様々

図14 インタビュー実施地区



なイベントの開催と工夫された活動（安心シグナル）により、情報の共有と住民同士のコミュニケーションを促進しようとする地道な地域活動が、住民に見える形で行われることにより、様々な不安を打ち消し、安心感の向上に寄与していると考えられる。

2) 目黒区下目黒町会

地域には、ホテルを含む大型複合施設がかなりの面積を占める。大きなイベントとして、サンマ祭りやサクラ祭りがあり、外部からも多くの人を訪れる。

以前には空き巣の被害も起きた。人通りが少ない場所では痴漢被害もある。とくに大型複合施設周辺は人通りが少なく防犯灯も少ない。イベントに来た人がゴミを散らかすことや、酔客のマナーの悪さを腹立たしく感じ、また川沿いの放置自転車、自転車によるスピード出しすぎなどのマナーの悪さも不快に感じられている。しかし、地域イベント時に町会として交通安全週間に協力してテントを張る活動では、来客者の相談にも応じて地域の安全確保に一役買っている。また、ラジオ体操では子どもと顔なじみになるなど、多くの地域行事は住民がまとまる機会となっている。

3) 目黒区祐天寺町会

東急東横線の祐天寺駅を中心に発展した町会で、狭い駅前通りがメインで、道路は路入り組んでおり、住宅も密集する。多くのマンションやアパートが建ち並び、典型的な中流の住宅街である。

見聞きされた犯罪は、女兒の追尾、ひったくりなどで、犯罪自体は少なく、地域の不安感はそれほど高くない。それよりも、地域の環境の変化として、町内会に加入しないアジア系外国人の増加、空き家の増加が不安感を高めている。また、よそから車で来てごみを捨てる、公園での若者のたむろや騒ぎ、トイレに常駐するホームレス、スプレーによる落書き、無灯火で走るマナーの悪い自転

車等、地域の秩序を乱す行為には不愉快な感情を抱いている。また空き家の増加には、地域の将来への不安を感じている。さらに、掲示板の掲示物が更新されず古

いままになっているなど、地域が管理されていないことを示すサインに対しても敏感である。

一方、地域では月1回の自主防犯パトロールが行われており、また夜遅い時間まで開いていて非常時に駆け込める店があるのは安全だと感じられている。また公園のベンチの構造を改善し、横になって寝られない対策がホームレスの減少につながったことで快適感が増したと感じている。

以上のように、相対的に治安が良好な地域であっても住民は環境や街並みの悪化、将来自分が犯罪や事故に巻き込まれるかもしれないことを示唆する兆候としての様々な物理的社会的無秩序やマナー違反に対して不安、不快の感情を抱き、また一方で様々な地域コミュニティ活動に対して安心感を抱くことが確認できた。

(4) イギリスの調査結果の概要

上記 NRPP の調査結果のうち、不安感に関する部分のみ抽出して概要をみると、ロンドン地区 6 箇所ですべて住民が不安と感じた行為は表 7 のとおりである。

この表から推察されることは、不安感の上位には「若者のうろつき」、「薬物使用」が目立ち、中には「反社会的隣人」や「路上のスケボー」などもみられ、犯罪行為ではない秩序違反行為か、あ

図 15 インタビュー実施地区



るいは軽微な犯罪が不安感上位を占める。すなわち、調査対象の住民は、明瞭な犯罪行為である「侵入盗」や「殺人」「路上強盗」よりも不安であると答えている点が注目される。この点につき、アントニー・ボトムズ (Anthony Bottoms) は、めったに遭遇しない凶悪犯罪よりも日常的に繰り返される秩序違反行為の方が、不安感が高いのではないかと述べている⁹。これらの行為は、住民に「自分の地区は統制されていない」という強力なシグナルを送るからであるという。

他方、「ゴミ放棄」、「落書き」、「立ち小便」なども上位であることにつき、インズは住民が抱く「不安」には、「怒り」や「不快」などの感覚も混入しているという。この「不快」は認知的要素であるとする。認知とは単純に言えば「考えること」、リスク知覚のことで、安全や安心を判断する。この判断は、犯罪や秩序違反行為に対する人々の解釈を通じて行われる。さらに、解釈は「表示 (expression)」（人々が語った話）、「内容 (content)」（リスク知覚の対象）、「効果 (effect)」（結果として生じた反応）というプロセスを経るという。また、「不安」と「怒り」は区別すべきで、前者では住民は問題を回避するなどの消極的行動を取るのに対して、後者では問題解決を求める積極的行動に出るなど、住民の反応が異なる。これらから、インズは、実際に直接被害を受けなかった人が不安を感じるのは、地域で発生した犯罪や無秩序が「不安」をシグナルとして伝達するからという。このように、地域で固有の不安感を煽る行為を「シグナル犯罪」と呼んで、不安感研究ではこの要素が極めて重要であると主張する。

インズは NRPP とは別に、イギリス犯罪調査 2009/2010 年の資料を利用してシグナル犯罪・秩序違反行為の強度を測定している¹⁰。これが図 16 であり、イギリス全国で調査された不安感分析を元としている。これによっても、軽微な犯罪や秩

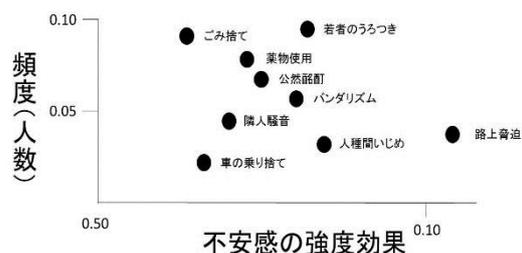
表 7 近隣の安全に対する脅威と認知されたシグナル

	A地区	B地区	C地区	D地区	E地区	F地区
1位	薬物使用	若者のうろつき	若者のうろつき	若者のうろつき	若者のうろつき	薬物使用
2位	若者のうろつき	ゴミ放棄	落書き ゴミ放棄 立ち小便	破壊行為 器物損壊	薬物使用	若者のうろつき
3位	暴行	器物損壊	器物損壊	街頭騒ぎ 公然飲酒	器物損壊 落書き	公然飲酒
4位	侵入盗	公然飲酒	街頭騒ぎ 路上強盗	公道での車レース スケボー	乗り物 放置	反社会的 隣人
5位	路上強盗	騒ぎ 車の暴走	薬物使用	殺人	侵入盗	器物損壊
6位	公然飲酒	口頭での虐待	侵入盗		口頭での虐待	ギャング

序違反行為が不安感に与える影響が大きいことを物語っており、とくに「若者のうろつき」が頻度、強度とも高く、これは表 7 のロンドン調査と合致している。

しかしながら、このような状況が把握されても、その詳細は地域ごと、回答者ごとに異なる。そこで、住民の犯罪や無秩序の理解や解釈は住民インタビューによって分析可能であるとして、NRPP では調査対象地区で数多くの住民インタビューが実施されている。そのスクリプトとして、「街角の電話ボックスが壊されており、この辺り電話ボックスはいつも壊れているんだ。実際、なんか嫌だね。嫌な予感がするよ。この地域は廃れているんだ。自分が住んでいる地域が、ね。」の例が引かれている。インズは、この会話を分析し、先の解釈に従い、インタビュー回答者の「何か嫌だ」という嫌悪感は感情的な「効果」であり、「この地域は廃れている」は認知的な「内容」に当たるとする。この認知、つまりリスク知覚は非常に重要であって、

図 16 無秩序行為の頻度と強度



これは人々の行動修正（たとえば、「引っ越す」とか）を示唆するからである。

このほか、NRPP は統制（安心）シグナルに関しても調査を行っており、とくに警察活動のあり方を提唱している。すなわち、住民に安心感を与えるのは、①警察官の地域活動が住民に見える形で行われていること（視認性）、②警察官が地域の集会や会合に積極的に参加し住民との良好な関係を構築していること（信頼性）、③地域で解決してもらいたい問題の優先順位が警察に理解されていること（問題解決性）であるとしている。

5. 考察

（1）調査結果の総合的検討

本研究は、従来種々実施されている治安調査には含まれなかった若干の仮説を設定し、実験的な試みを行った。

そこで、確認すると、本研究は次の事項を仮説として調査した。(i)「犯罪」不安感には、犯罪とまでは言えない無秩序の行為や状態が影響していること、(ii)地域でとくに強く不安感に影響している「不安シグナル」、「安心シグナル」がみられること、(iii)地域レベル「体感治安」と個人レベル「個人不安感」では不安感に相違があること、(iv)不安感には、単純な「不安」のほかに、「不快」、「怒り」、「恐怖」なども含まれていること、などである。このような試みは、わが国の研究にはみられない。

本研究の結果、次のような知見を得た。

①本研究では、不安シグナルや安心シグナルの不安感に対する影響をみた。不安シグナルは、地域に特徴的な軽微な犯罪や無秩序が住民に伝達されて不安感をおおる要因であり、安心シグナルは、逆に種々の活動や状態が安心感にプラスに作用する要因である。

これにつき、調査対象地域、墨田区と目黒区に

おける住民アンケートの結果から、住民の不安度が高い行為や状態について、次のような表8を作成した。犯罪行為については、「大いに不安」と答

表8 地域別の不安感順位

	墨田区		目黒区	
	無秩序	犯罪	無秩序	犯罪
1位	空き家・店舗	交通事故	暗い街灯	交通事故
2位	暗い街灯	子どもの声かけ	空き家・店舗	自転車盗難
3位	さびれた商店街	侵入盗	さびれた商店街	侵入盗
4位	若者の喫集	自転車盗難	ホームレス	子どもを声かけ
5位	ホームレス	無断侵入	未利用の公園	無断侵入
6位	未利用の公園	悪質詐欺	若者の喫集	悪質詐欺

えた回答数（図8参照）のみを計上し、秩序違反・無秩序では、4つの感情評価のうち「不安だ」と答えた回答数（図5参照）によりランキングした。

これを見て理解されることは、イギリス・ロンドンの状況を示した表7と比較してみても、物理的無秩序、社会的無秩序が上位にランクされ、なかでも人の行為ではない物理的無秩序が目立つ。まさしく、「環境不整備」が両調査対象地区で1, 2, 3位を占める。これに対して、「怖い人」グループ（若者、ホームレス）はむしろ相対的に下位にある。「犯罪」関係では、「交通事故」（もっとも、一般の人々は犯罪と考えていない可能性がある）がトップで、まず人々は日常生活の中で最も頻度の高い身の危険を重視していることが分かる。

「侵入盗」が比較的高い順位にあるのは、通常、侵入盗犯の意図は外観から判断できず、結果から「泥棒」と判断されるにすぎない。したがって、敷地内への侵入を含め、「何をされるか分からない」ため、住民の不安感が高いのであろう。また、同様に、悪質詐欺（たとえば、おれおれ詐欺）では、電話が掛かってきたが相手にせず、実際には被害はなかったという例を考えると、このようなケースは公的統計には計上されず、警察にも通報され

ないと思われるが、不安感が残るということはある。これが、「悪質詐欺」が犯罪の中で比較的上位にある理由と思われる。

このほか、住民アンケート調査の結果では、犯罪不安感には種々の感情が混入していることが見出された。不安シグナルの典型例な反応である「**迷惑・不快**」では「大声挙げて騒ぐ」が「怖い」のに対して、その他は圧倒的に「不快」であり、「**マナー・品行**」はさらにその不快感が強い。もっとも、体感治安と個人不安感を区別すると、「**環境不整備**」は体感治安よりも個人不安感に影響を与えることが確認された。

これらから考えられることは、従来の治安調査にも、「不安感」の中に「迷惑・不快」、「マナー・品行」という事項に対する不快感が混入し、不安感を高めていた疑いがある。

さらに、アンケート調査では、地域の状況、たとえば「地域に自分を気にかける人物」「(住民による)地域パトロール」「警官パトロール」「自宅近くに交番警察」、および地域の紐帯、たとえば「近所づきあい」もまた「安心シグナル」として作用している可能性があることが示された。また、住民インタビューでは、地域の紐帯を強化する役割として、地域における行事の多さ、町会が自前の集会を保有していることが観察された。これらはいずれも、比較的頻繁かつ気楽に地域住民が顔を合わせ、コミュニケーションの強化を図ることができるからと考えられる。つまり、地域で安心シグナルを支える基盤と言ってよいであろう。

②本研究では、地域レベルと個人レベルの不安を識別した。前者を「体感治安」、後者を「個人不安感」とした。つまり、体感治安は、地域における集合的なリスク知覚であり認知的であって、自分自身に不安がなくても種々の見聞によって不安感が形成される状況である。他方、個人レベルの不安感は大半の場合、主観的な感情である。不安感

をこのように識別する利益は、たとえば、ある家庭で発生したDV事件では当事者間には強い不安が残るが、地域の人々には不安は及ばさないからである。一方、子どもが居ない高齢者の家庭では、地域で子どもが誘拐、殺害された事件に対して個人レベルでの不安はないが、地域レベルとしては不安、つまり体感治安の悪化を感じるであろう。本研究の分析でも、被害経験や「怖がり」などのパーソナリティ要因が個人不安感に強く影響し、体感治安への影響には有意さは見られなかった。このほか、地域関連の質問項目には「体感治安」が、個人関連の質問項目には「個人不安感」の影響が強く現れ、両者の明瞭な相違が示された。

地域特性としては、体感治安と個人不安感では、目黒区の方が墨田区よりも体感治安はよいと答える傾向があり、個人不安感では、地域特性はみられなかった。

③本研究では、さらに、不安感に影響を与えられと思われる個人的な要因(パーソナリティ)についても区別し、「体力に自信」「用心深さ」「怖がり」などの影響を調べた。つまり、体力がある人は不安感が低く、用心深い人、怖がりの人は不安感が高い方に作用すると考えられるからである。結果としては、用心深い人は体感治安について影響がなく、個人不安感では影響が「ある」という分析になった。

(2) わが国における防犯対策への示唆

それでは、本研究の調査知見から、不安感解消のためにどのような施策が提言可能であろうか。わが国でも、本研究の分析によって、住民の不安感に強い影響を与える物理的社会的無秩序を確認できた。このような無秩序行為に対しては、イギリスのASBO制度のように、種々の規制をかけ刑罰化することも考えられる。しかし、これに対しては、イギリス国内でも、市民的自由をめぐる批判が少なくない¹¹。そこで、考えられるのが統

制（安心）シグナルの強化であろう。NRPP でも示されたように、安心シグナルとしての警察活動が重要であることはもちろんであり、われわれの住民調査でも木目の細かい警察活動を要望する声が多数聞かれた。ただ海外では、統制シグナルとして活用されるのは公的機関の介入策であり、個人の活動では困難であるとされるが、われわれは非公的な個人や団体の活動も安心シグナルの役割を果たしていることをアンケート調査でもインタビュー調査でも確認した。

この点につき、英米の研究で示唆的なのは、犯罪多発地帯でも不安感が低い地域、地域の満足度が高い地域が存在することである¹²。つまり、犯罪多発と高い不安感は連動していない点であり、そこに介在するのが統制シグナルである。本研究では、犯罪多発地帯が調査対象として選択されておらず、わが国でも同様の現象が生じているかどうかは不明であるが、住民インタビューでは安心シグナルと考えられる事項が散見され（表6「網掛け部分」参照）、これが良好な体感治安につながっているとも考えられる。その意味でも、わが国の地域における公私の活動では、この点を念頭に置くことが求められるであろう。

海外の研究によれば、実際、安心シグナルは安全・安心に対する何らかの公私のアクションが行われておれば機能し、これによって「この地域は活動が活発である」「この地域は良くなっている」という認識が地域に与えられれば、安心感は向上する¹³。逆に、割れ窓理論が示すように、「この地域は統制されていない（out of control）」と感じさせると不安感は一気に上昇する。要するに、体感治安や個人の不安感を実際の統計的事実よりも、心理的な側面が非常に強い影響を与えるのである。このためには、地域個別の優先的に解決すべき問題性を把握し、住民の目に見える形で、これを一つずつ潰していくような問題解決型の活動が求め

られる。確かに、住民インタビューでも示されたように、ゴミの収集場所が整頓されているか、不規則に散らかっているかで、住民の不安感、体感治安は大きく変化する。これは地域の景観、雰囲気というか、まさしく「ゲシュタルト」要因¹⁴が地域の治安に大きな影響を与えているのである。

本研究では、従来にみられなかった仮説をいくつか設定したが、一部の事項では十分な地域差や地域特性がみられなかったために、これらを支持するエビデンスを獲得するのに限界もみられた。これは本研究がわずか2ヶ所の狭い地域のみで実施されたことにも起因する。おそらく調査対象地域を増やせば、多種多様の安心シグナルを発見でき、それを推進する具体策が明瞭になると思われる。

今後は、本研究で示された不安シグナルと安心シグナルの分析を進め、同じ手法で他の地域にも応用可能な施策の実現を目指すべきである。このような施策を推進するためには、地域ごとの「安心度指数」ともいべき指標を算出するなどの試みが必要で、本研究の研究チームにおいても現在、この構想を検討中であり、近い将来、実現したいと考えている。

¹ 東京都調査（2011年）、警視庁調査（2012年）、内閣府調査（2012年）では、質問内容や比較対象年数などの相違はあるものの、治安の動向として「悪くなった」がそれぞれ33.2%,33.9%,81.1%で、いずれも「よくなった」を上回っている。

² 守山正・河合潔・河合幹雄・小島隆矢「座談会『犯罪現象と住民意識』～犯罪不安はどこから来るのか」犯罪と非行176号（日立みらい財団）2013年,p.18-65.なお、守山正「近年の犯罪傾向と体感治安の乖離～なぜ不安はなくなるのか」改革者2013年1月号（政策研究フォーラム）,2013年,p.52-56.

³ 代表的には、後述のマーティン・インズが主導して行った全国安心警察活動プログラム（National Reassurance Policing Programme, NRPP）がある。本研究も基本的にこの調査の手法や結果を基に、調査内容を設計し、住民調査を行った。

⁴ かつてイギリス犯罪調査（British Crime Survey, BCS）と称されたが、現在スコットランドを除いてイングランド・ウェールズ犯罪調査（CSEW）と呼ばれる。1984年に初め

て実施され、当初犯罪暗数を調べるための被害調査の性格を有したが、のちに犯罪統計をより正確に理解するために犯罪全体に対する事項を含む調査となり、毎年4万人に上る調査対象者に面接員が実施している。

⁵ 一例として、Ryan A. Davvenport, *Incivilities, Crime and Social Order: The Role of Repeat Experience*, University of Sheffield, 2010 (未公刊)。BCSのロンドン地区のデータを用い、反復された秩序違反行為が不安感にどのように影響を与えるかを探究している。

⁶ このプログラムは、2003年から2005年にかけて実施され、もともとは警察活動の改善を目的に実施されたものであった。イングランド16ヶ所を実験箇所を選定し、一定のプログラムを実施した後、その効果をそれと同数の対照箇所と比較した。つまり、プログラム実施の前後に実験群と対照群で基本研究と追跡調査を行っている。プログラムの内容としては、警察官の可視的な活動(視認性)、警察官の地域社会への関与(地域関与)、個別問題の優先(問題解決)であった。これらの介入策を行い、住民がどの程度、不安感を解消できたかが調査された(P. Quilton and R. Tuffin, *Neighbourhood Change: The Impact of the National Reassurance Policing Programme*, *Policing* vol.1, no.2, 2007。なお、守山正「犯罪不安感に関する一考察～「シグナル犯罪」論を手がかりに」*拓殖大学論集* 17巻1号(2014年)未公刊)。

⁷ マーティン・インズは、記号論や象徴的相互作用論の影響を受けて、実証研究に基づき不安感の分析を行い、そこで、地域には固有の犯罪(crime)や秩序違反行為(disorder)のシグナルがあり、それが伝達されることにより住民の不安感が形成されるとした(Martin Innes, *Signal Crimes, Social reactions to Crime, Disorder, and Control*, 2014.)。

⁸ 正確に言うと、「統制シグナル」は「安心シグナル」と同義ではない。インズの指摘にもあるが、統制シグナルはときに不安感を伝達するという。そこで、このような統制シグナルを'negative control signal'と呼んでいる。その例として、ある地域で警察パトロールが頻繁に行われるようになると、逆に住民は何か悪いことが起こったのではないかと感じる場合である(*ibid.*, p.15)。

⁹ Anthony Bottoms, *Disorder, Order and Control Signals*, *The British Journal of Sociology*, 2009, vol.60, issue 1, pp.49-50.

¹⁰ M. Innes, *op.cit.*, p.40.

¹¹ ASBO制度については、渡邊泰洋「イギリスにおけるASBO政策の展開」*犯罪と非行* 159号(2008年)165頁以下に詳しい。

¹² アメリカの例としてシカゴ市がイギリスの例としてはシェフィールド市が挙げられている。すなわち、前者において、シカゴ市内のリンカーン公園付近では高い犯罪率を示しながら安全に対する住民満足度が高い。この理由として、近隣の大学の活動や公園とこれと接する景観(*gestalt*)が関与しているとする。他方、シェフィールドの例では、公的機関の強力な介入が行われた結果、実際の高い犯罪率に関わらず、「この地域はよくなっている」という知覚が生まれ、安心感を与えたのだという(A. Bottoms, *op.cit.*, p.52.)。

¹³ *Ibid.*, p.52.

¹⁴ *Ibid.*, p.52.